

「博士論文」合否査定資料

申請者
職・氏名 黒川 悦子

学位の名称 博士（日本語日本文化）

論文名 内藤鳴雪研究 ― 子規と歩んだ俳句活動 ―

審査委員 主 査 吉海 直人

副 査 本間 洋一




副 査 藤田 真一

審査結果 合

2018.2.9 日本語日本文化専攻博士後期課程委員会 承認
2018.2.9 文学研究科博士後期課程委員会 承認

博士学位論文審査結果報告書




2018年 2月 6日

学位申請者	黒川悦子	
審査委員	主査	吉海直人 
	副査	本間洋一 
	副査	藤田真一 
<p>本学大学院生の黒川悦子から「内藤鳴雪研究—子規と歩んだ俳句活動—」という論文で、博士の学位の申請があった。A4用紙187枚の本文に50枚の付録が付いた大作である。これを受けて主査・吉海、副査・本間、副査（外部）・藤田の三名で審査にあたった。</p> <p>まず申請に必要な条件（査読付き学会誌掲載）は、解釈および俳文学報に掲載することで基準を満たしていることを確認した。その上で2月6日に公開の口頭試問を行い、各委員との忌憚のない質疑応答が行われたことを報告しておく。</p> <p>申請論文は大きく三部に分かれており、第一部は鳴雪と子規の出会いからの「子規と歩んだ鳴雪の俳句活動前期」、第二部は俳誌「ほととぎす」創刊以来の「子規と歩んだ俳句活動後期」、第三部は俳句雑誌での活躍が目立つ「子規没後の鳴雪の俳句活動」となっている。それぞれがさらに細かく章分けされて詳細に論じられている。</p> <p>それによって、本論文はこれまで研究の蓄積の少なかった鳴雪について、①鳴雪が蕉門の凡兆の影響を強く受けていること、②子規とともに鳴雪も蕪村に傾倒していること、③子規が編集に携わった新聞「日本」や「小日本」を俳句活動の場として活用していること、④加えて鳴雪自身、俳誌「俳諧草紙」「文庫」「千代田」「南柯」の編集を通して俳句活動を行っていること、⑤鳴雪の句集の製作年代を特定することに留意し、それを子規の俳句活動と密接にかかわらせながら、鳴雪の総合的な俳句活動を論じている点、独創性に富むだけでなく新見も多く、鳴雪研究を大きく進展・拡大させている点、高く評価される。</p> <p>以上により、審査委員は全員一致で黒川悦子の申請論文に対して、博士（日本語日本文化）の学位を授与するに値するものと認定した。今後なるべく早くこの成果を単行本として公刊してもらいたい。</p>		

博士学位論文審査結果要旨

2018

2018年 2月 6日

学位申請者	黒川悦子	
審査委員	主査	吉海直人 
	副査	本間洋一 
	副査	藤田真一 
論文題名		
内藤鳴雪研究 — 子規と歩んだ俳句活動 —		
(要旨)		
<p>黒川悦子は本学日本語日本文学科に編入し、近代文学を専攻した。卒業論文では女流俳人・杉田久女の研究を行っている。自身が「ほとゝぎす」派に属する俳人として活躍していることもあり、大学院の修士課程では「正岡子規の俳句革新運動の考察—新聞「小日本」を通して—」をまとめている。</p> <p>学部・大学院を通して近代俳句の研究を続けてきたわけだが、修士論文をまとめる中で、新聞紙掲載の重要性に注目し、そこから必然的に子規の側にいる鳴雪の存在の大きさに気づいた。その鳴雪の扱いが子規門下の中で極めて軽かったことから、その生涯を総合的に探究することをめざし、そこから子規との密接な関わりを論じることになった。</p> <p>従来の研究では、若い弟子の高浜虚子や河東碧梧桐が取り上げられることが多く、鳴雪に光が当たることはほとんどなかった。そもそも鳴雪は子規より二十歳も年長であり、当初は鳴雪が寮の舎監であり、子規が入寮学生という立場だった。その後、鳴雪は子規に俳句の教を請うわけだが、単なる師弟関係では割り切れないものがある。むしろ子規は鳴雪の力を頼みにしており、だからこそ子規は鳴雪とともに俳句革新運動を展開しているのであるから、鳴雪の俳句活動を含む人生を考察することは、それ自体研究として評価されるだけでなく、鳴雪を通しての子規研究としても有効といえる。これが本論文の狙いである。</p> <p>なお黒川悦子の業績は、俳句の専門誌を中心に蓄積されており、既に何冊もの単行本に論文や解題などを執筆している。学位論文提出に必要な条件（査読付き学会誌）も「解釈」および「俳文学報」に論文を掲載することで満たしていることを申し添えておく。</p> <p>それが大作の学位請求論文（A4用紙187枚・付録50枚）に結実しているのである。なお申請された論文は、所定の手続きを経て受理されたものである。主査は吉海、副査は学内が本間洋一、学外が関西大学の藤田真一（蕪村研究者）が務めた。各自論文を査読した上で、2月6日に公開の口頭試問を行い、忌憚のない質疑応答が行われたことを報告しておく。</p> <p>申請論文は大きく三部構成になっている。第一部は鳴雪と子規の出会いからの「子規と歩んだ鳴雪の俳句活動前期」、第二部は「ほとゝぎす」創刊以降の「子規と歩んだ俳句活動後期」、第三部は「子規没後の鳴雪の俳句活動」となっている。</p> <p>こういった考察を通して、これまで研究の蓄積の少なかった鳴雪について、黒川は五つの点について実証的に論じている。それは、①鳴雪が蕉門の凡兆の影響を強く受けていること、②子規</p>		

7




とともに鳴雪も蕪村に傾倒していること、③子規が編集に携わった新聞「日本」や「小日本」を俳句活動の場として活用していること、④加えて鳴雪自身、俳誌「俳諧草紙」「文庫」「千代田」「南柯」の編集を通して俳句啓蒙活動を行っていること、⑤鳴雪の句集の製作年代を資料的に特定していくことである。

さらにそれを子規の俳句活動と密接にかかわらせながら、鳴雪の総合的な俳句活動を論じている点、独創性に富むだけでなく、鳴雪研究を大きく進展・拡大させており、高く評価される。と同時に、そこから正岡子規の俳句活動にも光が当てられることになり、子規研究としても有益であろう。

以上により、本論は博士論文に値するものと認定する。今後なるべくこの成果を単行本として公刊してもらいたい。

博士学位論文内容要旨

2018年 2月 6日

学位申請者	黒川悦子	
審査委員	主査	吉海直人 
	副査	本間洋一 
	副査	藤田真一 
(要旨)		
<p>本学大学院生の黒川悦子から提出された学位申請論文「内藤鳴雪研究—子規と歩んだ俳句活動—」(A4用紙187枚)は、以下のような構成(目次)になっている。</p>		
<p>序論 研究史</p> <p>第一部 子規と歩んだ鳴雪の俳句活動前期</p> <p>第一章 鳴雪と子規</p> <p>第二章 鳴雪と凡兆</p> <p>第三章 鳴雪と蕪村</p> <p>第二部 子規と歩んだ俳句活動後期</p> <p>第一章 新旧交代</p> <p>第二章 鳴雪と松山版「ほととぎす」</p> <p>第三章 鳴雪と「蕪村句集講義」</p> <p>第三部 子規没後の鳴雪の俳句活動</p> <p>第一章 鳴雪と「文庫」</p> <p>第二章 鳴雪と「俳諧草紙」</p> <p>第三章 鳴雪と「南柯」</p> <p>結論</p> <p>資料・参考文献・年表</p>		
<p>タイトルが示すように、本論文は俳人・内藤鳴雪の総合研究となっている。その鳴雪は、正岡子規の寄宿舍の舎監であり、二十歳も年長であるにも関わらず、子規に俳句の教えを乞い、常に子規の側にいて、子規とともに近代俳句の革新に大きく貢献した人物である。</p> <p>それにもかかわらず、従来は鳴雪の評価が低く、研究もあまり行なわれてこなかった。そこで鳴雪に光を当てることで、鳴雪研究を進展させるのみならず、子規の俳句革新運動をも新たな視点で捉えなおすことを論じている。</p> <p>論文は大きく三部構成になっている。第一部は鳴雪と子規の出会いからの「子規と歩んだ鳴雪の俳句活動前期」、第二部は「ほととぎす」創刊を中心にした「子規と歩んだ俳句活動後期」、第三部は「子</p>		

規没後の鳴雪の俳句活動」である。

第一部の前には序論と研究史があり、従来の鳴雪研究について解説されている。それを踏まえた上で論が展開されている。第一部では第三章の「鳴雪と蕪村」が秀逸である。「蕪村句集」の発見に懸賞が掛けられ、それを仲間達が競って捜し求める中、最後に鳴雪が版本を手に入れる経緯は、読み応えがあった。

第二部は「ほととぎす」創刊における鳴雪の重要な役割や、「蕪村句集」の講義をめぐって、鳴雪と子規あるいは虚子たちとの句風の違いが明らかにされている。




第三部は子規の没後、鳴雪が俳誌や雑誌の紙面で俳句活動を続けている点が論じられている。そういった中で、俳句入門者（若者）の指導者・文筆家としての鳴雪の役割が浮き彫りにされている。

こういった考察を通して、これまで研究の蓄積の少なかった鳴雪だが、俳句革新運動の中でかなり重要な役割を担っていることが明らかになった。本論文は鳴雪の総合的な俳句活動を論じており、獨創性に富むだけでなく、鳴雪研究を大きく進展・拡大させたものとして高く評価される。

以上により、本論文は博士論文に値するものと認定する。今後なるべくこの成果を単行本として公刊してもらいたい。

試問結果の要旨

2018年 2月 6日

学位申請者	黒川悦子	
審査委員	主査	吉海直人 
	副査	本間洋一 
	副査	藤田真一 

(要旨)

本学大学院生の黒川悦子から「内藤鳴雪研究—子規と歩んだ俳句活動—」という論文で、学位の申請があった。これを受けて公正に審査委員が決められ、主査・吉海直人、副査（内部）・本間洋一、副査（外部・関西大学教授）・藤田真一の三名で厳正に審査にあたった。

各委員には事前に申請論文の複写物が渡され、余裕をもって査読した後、2月6日に本学で公開の口頭試問を行なった。その席上で申請者本人に対して論文内容の確認、ならびに各委員から忌憚のない質疑応答が行なわれた。70分を超える試問であったが、各委員からの専門的な質問に対して、申請者は一つ一つ丁寧かつ適切に応答した。この口頭試問を通して、申請者の学力・人物ともに申し分ないことが十分確認できた。

また申請論文について、内藤鳴雪は子規とともに俳句革新運動を進めた重要人物であるが、何故かこれまであまり評価されず、研究の蓄積も少ない。その鳴雪に光をあて、鳴雪の総合研究を行う中で、俳人以外の鳴雪の多彩な文人としての側面（編集者・文筆家・指導者など）が論じられており、それが鳴雪研究のみならず子規や虚子の研究にも自ずから新たな側面を切り開いていることが論じられている。

試問を通して論文が独創的かつ斬新な、それでいて新しい資料を用いたものであり、随所に豊富な新見が見られるものであることを委員一同で確認した。

よって審査委員は全員一致で黒川悦子の申請論文に対して、博士（日本語日本文化）の学位を授与するに値するものであることを決定した。